

南極観測隊に参加して

第49次日本南極地域観測隊
越冬・環境保全担当
赤田 幸久

偶然に訪れた幸運

そもそも南極観測に関する知識は皆無に等しく、南極といわれて思い浮かぶのは皇帝ペンギンとピンソンマシフくらいのもので、自分には全く無縁の世界だと思っていた。

2006年7月下旬、チベットへ遠征登山をするためのミーティングを開いた。その席に長山協の柳沢会長をお招きし、色々とおアドバイスを頂いていたのだが、どういう話の流れだったか、南極の話題になった。確かフランススアッシュクロフトの著書「人間はどこまで耐えられるのか」の話題がきっかけとなり、極地、そして南極観測の話へ発展したのだと思う。その時、柳沢会長のお話をお聞きして、初めて南極観測隊の概要について知ることになった。そして、私の心の中に南極行きの火が灯ったのもその時であった。その翌日、常念小屋で偶然2冊の本に出会った。国立極地研究所の神沼先生から常念小屋に贈られた「南極情報101」と「南極の四季」である。どちらも面白くて、南極に対する私の好奇心を膨らませてくれた。とりわけ、ポストーク基地における - 88.3 という気温は驚異であり、「うんと寒いところで小便したらどうなるのだろう？」という子供の頃の素朴な疑問が頭に浮かんだ。やがて「これはもう自分で行って確かめるしかない」という強い気持ちに変わっていった。

2006年9月下旬、チベットへ向けて出発する1週間前に必要書類を提出した。そして、帰国後12月初旬に極地研での面接、翌1月に身体検査へと進んだ。南極観測の概要をはじめて知ったあのミーティングから、たった6ヶ月である。その間に自分の中に新たな目標が生まれ、そして急激に進展したことは今振り返っても不思議な気がする。2007年7月、極地研での勤務が始まってから知った事だが、何年間もチャンスを待つてようやく隊員になられた方も少なくない。その時、改めて自分の幸運を実感した。

環境保全の仕事

環境保全部門では主に次のような業務を担当している。

- ・昭和基地、および野外活動から出る廃棄物の処理と管理
- ・排水浄化設備の維持管理と処理水質の管理
- ・野外観測拠点の廃棄物調査・回収、昭和基地周辺海域の海水サンプリングなど

また、49次隊の特異な点は帰国時に「しらせ」が就航出来ないため、持ち帰り物資量が大幅に制限されるという事だった。環境保全部門としても特定サンプル以外は持ち帰り出来ない、つまり廃棄物の2年越冬に備えなければならなかった。この課題に対して私がやろうと決めた事が二つある。一つは可能な限り廃棄物を減量して梱包数を削減すること。二つ目は、50次隊のために廃棄物保管庫の余剰空間を確保する事である。

廃棄物の減量については、一般可燃物をはじめ木枠・ダンボール類は例外なく、全て焼却処理する事で対応した。夏作業で出た廃棄物の焼却処理が完了したのは4月16日、私にとっては忘れられない記念日である。また、越冬中には生ゴミ処理装置で生成された炭の焼却を試みた。これは結果が良好で、10分の1程度に減量できた。廃棄物保管庫の余剰空間確保については、屋外保管に耐えられるエコバックを多用した。エコバックに梱包する廃棄物はプラ・不燃物などだが、単に詰め込むのではなく、圧縮梱包機をフル活用して最大限に減容した。その結果、越冬中の廃棄物の殆どが屋外保管可能となり、48次隊から引き継いだ時と変わらない余剰空間を50次隊に引き渡すことが出来た。私の実施した作業方法は、従来と比べて処理工程が増えるため日常的な手間はかかるが、トータルで見れば合理的であったと自負している。

環境保全の仕事ばかりが大変な訳ではないが、夏期間を中心に際限なく出てくる廃棄物に辟易した時もあった。それでも何とか任務を全うできたのは、多くの隊員のご協力のおかげである。



廃棄物の圧縮作業

ダンボールも圧縮する事で効率良く焼却できる。

越冬を経験して感じたこと

日本を出発するにあたり不安はなかった。準備には万全を期し、現場では予期せぬトラブルがあるのは当たり前で、みんなで知恵を絞って体を動かせば、大概の事は解決できると考えているからだ。実際に越冬生活を経験してその通りだと感じた。49次隊でも幾つかのハプニングはあったが、素晴らしいチームワークで臨機応変に対応してきたと思う。このことが越冬生活の一番の醍醐味かも知れない。

越冬中には幾つかの貴重な経験をさせて頂いた。ミッドウィンター祭をはじめとする基地内でのイベントや日常生活も楽しかったが、やはり野外活動が良かった。ルート工作の作業支援をはじめ、内陸旅行や沿岸旅行等どれも思い出深い。特に記憶に残った事が三つある。内陸のみずほ基地では - 40 、風速15m/sほどの気象条件の中で車両整備を手伝ったが、グリスポンプを握る手指が5分程度しかもたなかった。沿岸旅行隊がやむなくブリザードの中を帰還した時には、雪上車を誘導するため基地上陸点まで出迎えたが、視界が悪すぎて駐車場までの誘導はおろか、櫂の切り離しすら出来なかった。みんなでロープを結びあい、無事に基地居住区に戻れた時は嬉しかった。私自身が参加した沿岸旅行では、幅4mものクラックに前進を阻まれ、海氷の怖さを実感した。これらの体験は今後も忘れることはないだろう。ただ、自分の本能が「これはヤバイぞ」と警報を発したあの経験、2000年12月の富士山頂で遭遇した - 11.2 、最大瞬間風速58.3m/sを凌ぐものはなかった。

越冬中に気象部門のチーフ吉見さんからお聞きした「南極よりも冬の富士山の方が厳しい…」という言葉が印象的だった。私も自分の経験から同じ思いだが、この事は裏を返せば、現在の南極観測活動が充実した基地設備や雪上車などのシェルター、そして行動規制によって守られていることの証だと思う。これまで昭和基地とその設備を作ってきた諸先輩方と、49次隊においても基地設備を維持管理して頂いた機械隊員には頭の下がる思いである。ただ、1年を通してTシャツ半パンで過ごせる今の基地環境を、快適すぎると感じるのは私だけだろうか。



海氷上の巨大クラック

このクラックによって、前進を阻まれた。

帰国後 の自分に起こった小さな変化

2009年2月下旬、帰国直後は標準体重を4kgほど超過していた。また、越冬中に蓄えた腹まわりの脂肪も気になっていた。3月中旬から登山を中心としたリハビリを開始し、5月合宿をもってようやく標準体重に辿りつき、ほぼ以前と同じ登山が出来るようになった。

帰国後、自分に起こった変化がある。それは「買い物カゴ」を利用する様になった事だ。実に些細なことだが、環境保全隊員として南極に行き、ゴミ処理の苦労を経験しなければ、今でもレジ袋を利用していたかも知れない。買い物カゴを使えば、やがてゴミとなる余計な包装を自宅に持ち込む事もないし、何よりレジ袋から品物を出し入れする手間が省けるので大変合理的だ。買い物以外にも、書類などの運搬に重宝している。

帰国後、地球環境について尋ねられた事があるが、もとより地球環境について語れる見識もなく回答に窮した。ただ、「地球にやさしい」などという表現には以前から違和感を覚えていた。この手の表現は企業広告の匂いがするからだろうか。そもそも、人間が地球環境を守ろうとするのは「人類が末永く存続するのに都合がいいから」だと思うし、その方が自然な考え方だと思う。南極の温暖化についても、メディアで取り上げられることがあるが、往々にして危機感をあおる報道が殆どだ。メディアは社会の不条理を叩く使命があるから、特定の信念や人々の心情に左右され易いのだろう。それに対して、実際に前線で活動している観測・研究者の考え方は非常に客観的だ。これも南極で越冬したからこそ理解できた事だ。これからは、私ももっと客観的に身近な環境問題をとらえていきたいと思う。